

景観に刻まれた歴史

-20 世紀初めのアルタイ・オリアンハイ左翼副都統旗の地図について-

オリヤス・ムンゲンフーギーン・ガンボルド (ホブド大学)
上村 明 (東京外国語大学)

はじめに

この論文で、われわれは、20 世紀初めに制作された 1 枚の古地図の情報から、その当時の西モンゴルの歴史的状況を読み取ろうとする。さらに、その地図に描かれている景観が現在どうなっているか現地調査することによってえた情報によって、現在から過去へと時間をさかのぼり、その景観にのこされた歴史の刻印を読み取ろうとこころみる。

その際、従来のように文書資料をつかうだけでなく、現在の地図や映像資料、GPS や GIS のデータ、さらには現地での景観の調査や聞き取り調査を複合的に用いる方法をとった。また、その方法をより精緻なものにするための考察をおこなった。

地図について

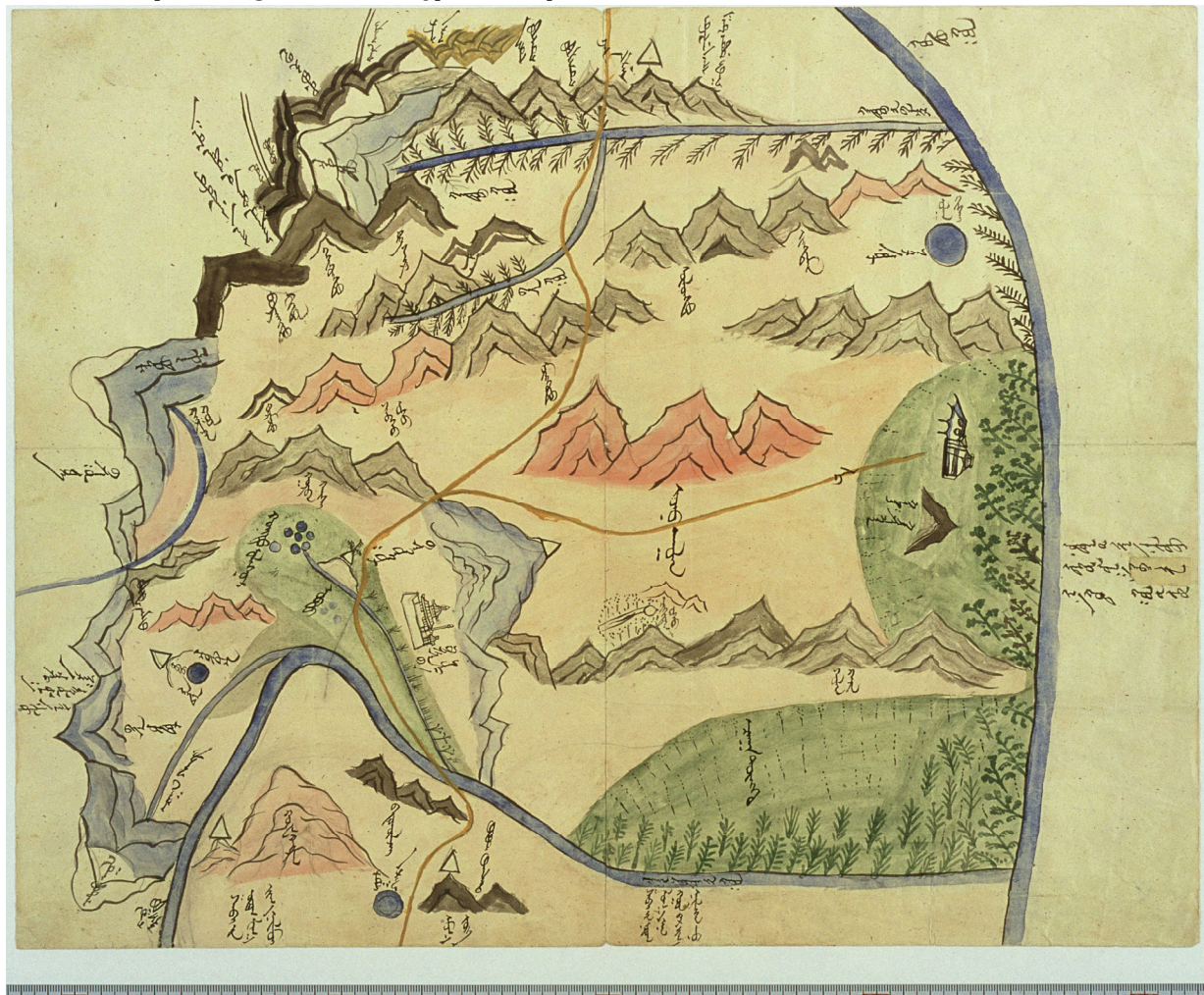
この地図にはタイトルも日付もない。しかし、ホブド川やツァガーントゥンギ（現在のバヤン・ウルギー県アルタンツグツ・ソム・センター）といった地名から、ホブド辺境のアルタイ・オリアンハイ七旗のうちの左翼副都統旗（メーレンギーン・ホショー）、ボグド・ハーン時代の名称ではズトゲルト公旗 (*Jidgultu gung-un qosiyu*) の地図であることがわかる。

作成された年代は、1912 年から 14 年のあいだである。それには 2 つ根拠がある。ひとつは、地図左上の“*Sarayul güng-ün nutuy-luy-a jiq-a neyilümüi*”「サロール公領と境を接している」という記述である。この「サロール公」とは、清代アルタイ・オリアンハイ右翼 3 旗のうちのひとつの旗の総管であったゴンボジャブ (*yombojab*) であり、1912 年ボグド・ハーンに帰属してサロール公に序せられた。本地図の旗の総管ツァガーンビリグ (*Čayangbilig*) も同じく 1912 年ボグド・ハーンに帰属してズトゲルト公に序せられる。つまり、この地図はサロール公ゴンボジャブがボグド・ハーンに帰属した 1912 年以降に作成された。

もうひとつの根拠は、やはりこの旗と 3 つの方角で境を接する土地についての記述 3 カ所に“*šabi-yin nutuy*”「シャビ領」という言葉が見えることである。「シャビ」とは、高僧の領民を意味し「シャビ領」は、その高僧の領地を意味する。この時代西モンゴルのこの地域で領地をもつ僧といえば、ジャー・ラマことダンビージャンツァン (*Dambijantsan*) 以外にいなかった。彼は、西モンゴルを清朝から開放する戦闘での功績をもって、ボグド・ハーンより“*Barayun kijayarun olan mongyol ayimay-i dayayulun toqoniylqu sayid, ünen kücün tegöldör noyan qutuytu nomun qan jasay lama*”「西辺境のあまたのモンゴル部族を平定する大臣、真実と力の完成したノヨン・ホトクト・ノモンハン、領主たるラマ」(*YTA:A130-1-10-5*) の称号を与えられた。そして、西モンゴルの領主たちから領土と領民や僧をあつめ、ホブドの北“*Munjik*”あるは“*Shar Tsek*”という土地に新しい国を作ろうとしていた。その試みは、1914 年 2 月ロシア当局によって逮捕されるまで続いた。(Бурдуков 1969: 102, 114)

この地図の特徴としては、年代はあたらしいが、旗の境界が線で描かれていない、方眼が引かれていない、山々が描かれる方向が南だけでなくばらばらの方向から描かれていることなど、この時代の規範では描かれておらず、ふり描画法が目立つ。テントも寺院もおおきく描かれている。また、規範どおり地図の上部が北、下部が南になっているが、その「北 *qoyitu*」や「南 *emün-e*」とは、西モンゴルの民俗方位での名称であり、磁石の方位では、地図の向かって右が北である。(Kamimura 2005)

図1：アルタイ・オリアンハイ副都統旗図(1912-1914?) 東京外国語大学図書館蔵
(<http://mongol.tufs.ac.jp/landmaps/14S.html>)



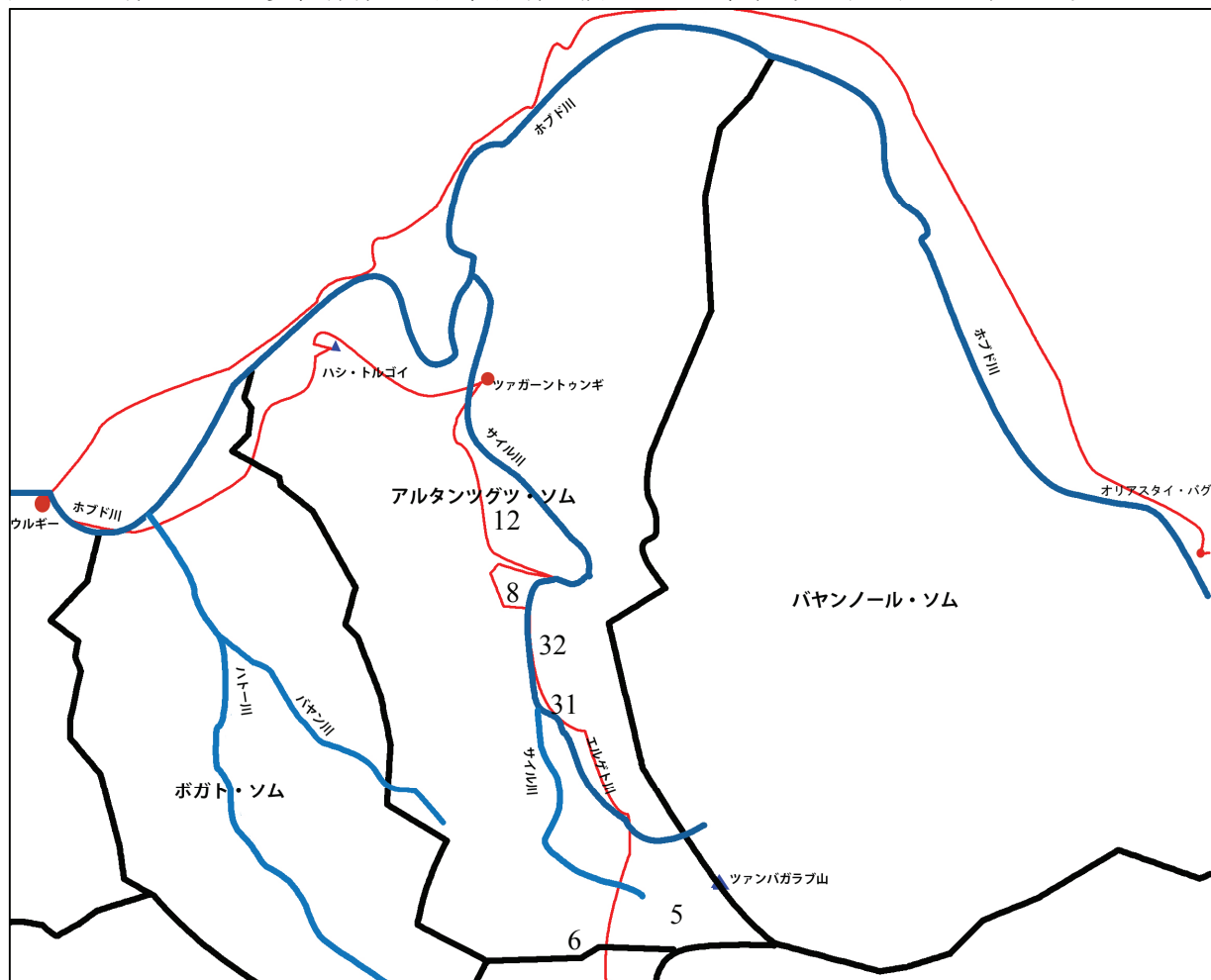
現地調査

われわれは、2011年3月11日から15日、この地図に描かれているアルタイ・オリアンハイ左翼副都統旗、現在のバヤン＝ウルギー県アルタンツグツ・ソムの土地を、地図の情報と比較すべく調査をおこなった。3月11日ホブド市を出発し、エルデネブルン・ソムを縦断、バヤン・ウルギー県トルボ、アルタンツグツの両ソムの境界を通り、ツァンバガラブ山の西側に到達した。ここから地図に描かれた景観—山や川、湖、オボー—がはじまる。

われわれは、さらに北上し、アルタンツグツ・ソムのソム・センターであるツァガーントウングに入り、そこからホブド川の南岸を西に進んで、バヤン・ウルギー県の県都であるウルギー市に入った。そののち、ホブド川の北岸を東に向かい、オブス県ウムヌゴビ・ソムのオリアスタイ・バグを経て、ふたたびホブド県に入った。そして、同県エルデネブルン、ボヤントの両ソムを経由してホブド市に帰還した。途中12日ツァガーントウングで東日本大震災発生と福島第1原子力発電所の爆発を知り、予定を大幅にちぢめた。

ツァガーントウングでは、アルタンツグツ・ソムのソム長バグワドルジ氏に、古地図に描かれた場所の位置を、現代の縮尺10万分の1の地図上に示していただいた。

図2 黒線がソムの境、青線が河川、赤線は調査ルート、番号は下の表の地名と一致している。



以下に、地図上の名称と現在の名称、景観、伝説・言伝え、オボー祭りなどの儀礼について、表にする。

表1 地名対照表

№	地図上の名称	現在の名称 (位置、景観、言伝え、儀礼)
1	časutu ayula	ツェンバガラブ・オール(山) (南麓はホブド県エルデネブルン・ソム、西はバヤン-ウルギー県トルボ・ソム、北は同県アルタンツグツ・ソム、東は同県バヤンノール・ソムに属する)
2	ergetü yool	エルゲト・ゴル(川) (ツェンバガラブ山の北東に源をもち、真北に流れてホー・ハイルハン山のそばから東に向かって流れ、ホブド川にそそぐ)
3	čayan sayiri	サイル(ツェンバガラブ山の北東から東に向かい、ホー・ハイルハン山の近くでグンサイル川、その後エルゲト川と合流し、ホブド川にそそぐ。
4	čayan siroi-yin yool	サイリーン・ゴル(川) (ホー・ハイルハン山の近くでサイルとグンサイル川が合流してホブド側にそそぐまでの川の名で、現在土地の人間は、サイル川と呼び、そこの牧地を秋當地として使っている)

• 上記の川より北に位置する地名		
5	bayan öndör	バヤン・ウンドゥル(夏营地、ツァンバガラブ山から南西に連なる山)
6	altan čögöce oboo	アルタンツグツ (夏营地、ツァガーンサイルの西側、バヤン・ウンドゥル山の東にある小さな湖。「副都統旗の最後の領主ツァガーンビリグがドゥルベドから后をもらった。その名はアウシャーといった。この旗では夏の末の月にを祭る習わしがあった。ある年アウシャー后は、金杯をみずうみに投げ入れ祭った。それからこのみずうみをアルタンツグツ(金杯)と呼ぶようになった」という言い伝えがある。この湖は、水が外から流れ込むことも外に流れ出ることもなく、地下から湧き出る水によって水量を維持している。この土地で畏れ敬られ祭られている場所のひとつである。それでのちにソムができるときこのみずうみの名をとったのである。古地図には、祭られるオボーが描かれている。現在でもこのオボーは存在するが、おもにウランバートルのような遠くに住むこの土地の出身者がときどき祭っている)
7	bayan kötöl	バヤン・フトゥル (バヤン・ウンドゥル山に連なり、その北東に位置する。アルタンツグツ湖の東にある峠)
8	qoyitu olangnur	ホイト・オロン・ノール(湖)(バヤン・ホンゴル山の西側から南に並ぶ7つのちいさな湖が古地図に描かれているが、現在みずうみは存在しない。地図では、ここを水源としたちいさな河が南に流れシャル・シヨロイ川に注ぎ、川岸にはヤマナラシやヤナギが生えている。現在はカザフ人たちの春营地が建てられている)
9	oboo	ボル・トルゴイ (アルタンツグツ・フレーの僧たちは夏この夏营地に来てこの岡にオボーを建て祭っていた。ホイト・オロン・ノールから流れ出る川の西岸に位置する。現在人々は、「オボーのあるボル・トルゴイ」と呼ぶ。崩れているがその頂にかつては祭られていたと分かるふりいオボーがある)
10	küriyen-ü süm-e	フレーニー・ホンホル (ボル・トルゴイの南東面、アルタンツグツ・フレーの僧たちが夏を過ごした場所。ホイト・オロン・ノール川の東岸、バヤン・ホンゴル山の南西麓にあった。現在は、完全に破壊されていて、その痕跡もみることはいできない)
11	地図に地名なし	オルト・オロン・ノール (地図には、ボル・トルゴイの南に3つのみずうみが描かれているが、名前は記されていない。現在人々は、オルト・オロン・ノールと呼んでいる。ホイト・オロン・ノール川の南にある。現在水はない)
12	bayangqonyor	バヤン・ホンゴル山(ホイト・オロン・ノールの西側にある高い山で、むかし祭っていたオボーがある。山の南でアルタンツグツ・フレーの僧たちが夏を過ごしていた。このオボーは夏の初めの月に祭っていた。1990年以降2度祭られた)
13	γurban qayisai	ゴルワン・ハイス (ホイト・オロン・ノールの北にある3つの谷のある黒い連山。谷を「ハイス」と呼ぶことからこの名称がついた。オイラド方言でハイスとは鍋のことである。この山の3つの谷はちょうど鍋のようにくぼんだ地形をしている。夏营地である)
14	kürmütü	クルムト (ゴルワン・ハイスの西にあるちいさな黒い山。夏营地)
15	sebsü usu	セウス・オス (クルムト山に連なる2つの赤い山)

16	möngkötü	ムンフト(セウス・オスに連なる山の名。夏营地)
17	čikitei usu	チフテイ・ボラグ(泉) (チフテイ・フトゥルの西側にある、南西に流れをつくる湧き水。現在は、その水源は柵で囲われており、流れに沿ってハネガヤやヤマナラシが生えている。ソム・センターから約10km)
18	čayan tünggü	ツァガーントウング(ツァガーン・サイル川とホブド川が合流する場所。副都統旗のアルタンツグツ・フレーまたはツァガーントウング・フレーはここにあり 1937 年ごろ閉鎖された。のちにここがソム・センターになった。寺院跡は、ソム・センターから北に 5 キロのホブド川のそばにある。しかし、現在は土壌の喪失や人や家畜の足によって壊され、はっきりした痕跡は残っていない)
19	sula qara	ソル・オール(山) (ツァガーントウングの北にある黒くながく連なる山。山中に春营地がある)
20	ono ayula	オノ・オラーン(チフテイ・ボラグの西にあり、東にソル山を見ることができる位置の山。オノ (隙間) のような鞍部をはさんで2つの赤い山が連なる。それでオノ山と名づけられた。現在、山の南側をアルタンツグツからバヤン・ウルギー県に至る自動車道が走っている)
21	qaši qayiračay	ハシ・トルゴイ(オノ山の北、ホブド川の川辺にある小さな褐色の岩の丘。周囲の山々から孤立している。丘のまわりはホブド川のほとりのヤナギやヤマナラシ、ハルガナなどが混生している。春营地や冬营地の固定家屋が建てられている。副都統旗最後の領主ツァガーンビリグの秋营地であった。それで地図には彼のゲルとテントが描かれている。秋营地に適した場所。彼がツァガーン (白い) ・エルヘトという父系クラン(ヤス・骨)に属していたので、この土地の人々は、「ツァガーン (白い) 」という言葉タブーとし、今日まで「ギャラーン」という言葉で言い換えていたという。現在、この土地はハシ・バグに属し、カザフ人たちが住んでいる)
22	sir-a nuur	シャル・ノール(湖)(ハシ・トルゴイの西、ホブド川の岸から約 6 km に位置する。山の懷の平坦な窪地に抱かれたおおきなみずうみ。現在も水量が豊富である)
23	ulayan kisai	オラーン・ヒャサー(シャル湖の南に位置するおおくのちいさな山々のなかで際だって見えるたかく赤く切り立った山。遠くからでもよく見える)
24	ölöngtū	ウルント・オール(山)(夏营地。地図では実際の位置よりハトー川より描かれている)
25	jingdemil	ジンデメル (ウルント山に連なる夏营地)
26	bayan yool	バヤン・ゴル(川) (セウス・オス、ムンフトウ山の西から発しハトー川に注ぐ。夏营地)
27	qatuu yool	ハトーギーン・ゴル(川) (ハトー山塊に源をもちホブド川に注ぐ。川辺にヤナギやヤマナラシが生える。現在は、木はほとんどなく、水も涸れて夏雨が降ったときのみ水が来る。われわれが訪れた 3 月にも水はなかった)
28	qatuu-yin belcir	ハトーギーン・ベルチル (ハトー川がホブド川に合流する場所)
29	časutu	ツァスト(ハトー山塊にあるハトー川が源を発する高山)

30	burqangtu kötöl, gesigüngtū, köke sayiri	ハトー山塊の支脈の山々。われわれはこれらの場所に訪れていない。これら現在のボガト・ソムの土地にはカザフ人が住み、ふるい地名は忘れられてしまったと前述のパグワドルジ氏という。
● 地図の下部に位置する地名		
31	quva qayirqan	ホー・オール(山) (夏营地。近年春に营地するようになった。ツァンバガラブ山の北東、エルゲト川とツァガーン・サイル川の合流点に位置する。山の色が「ホー」(黄色みがかった褐色)なのでこの名がついた。むかし祭られていたオボーがある。このオボーを夏の中の月に祭っていた。地図にもこのオボーが描かれている。1990 年以降このオボーを山の頂に再興し 2 度祭った。アルタンツグツ・ソムが創設された後、この山の西のエルゲト川の河畔に、ソム・センターが夏の間移動してくるようになった。この山の南からジャー・ラマの領地になる)
32	batuöljei	グリーン(川の)・ハル・オール(山) (ホー山の北に位置する南北に長く伸びる山。ツァガーン・サイル川の南の岸に位置するのでこの名になった。現在でもこの山にある春营地を人々はバトウルジー春营地と呼んでいる。むかしこの地にバトウルジーという名の弓矢の名手が住んでいたことからこの地名がつけられたという言い伝えがある)

調査は、主にアルタンツグツ・ソムの土地で行ない、古地図に描かれた景観と現在の景観を比較した。地名の変化については、上記の 32 の地名のうち大部分でふるい地名が現在も使われていたが、若干の変化があったものもある。

たとえば、つぎの 7 例では、(前者が旧名称、後者が新しい名称)

- | | |
|--------------|--------------|
| 1. ホー・ハイルハン | ホー・オール |
| 2. オノ・オール | オノ・オラーン |
| 3. ハシ・ハイルツァグ | ハシ・トルゴイ |
| 4. ソル・ハル | ソル・オール |
| 5. チフテイ・オス | チフテイ・ボラグ |
| 6. オボー | オボート・ボル・トルゴイ |
| 7. フレーニー・スム | フレーニー・ホンホル |

というように、その名称が変わっている。

また、地図のふるい名称は使われなくなったものの言い伝えにそれが残っていることもある。バトウルジー山は、グリーン・ハル・オールと呼ばれるようになったが、言い伝えにふるい地名が残っているのがその例である。地図に景観は描かれているが地名がないこともある。オルト・オロン・ノール(湖)がその例である。地図上の描かれている位置で現在の地名との同定が可能である。また、領主や僧たちのいた場所は、それと分かるように描かれていることもわかる。ここ副都統旗で祭られていた 3 つの土地、バヤンホンゴル、ホー・ハイルハン、アルタンツグツ湖にあるオボーも地図にはっきり描かれている。現在土地の人々は、これらオボーを定期的には祭らなくなったとはいえ、むかし祭っていたことを忘れていないということも調査であきらかとなった。地図には、旗の境界が四方どの土地に接しているかで記述されている。それによると東・北・西でダンビージャンツァンの領地に接していたことがわかる。

われわれは、地図に描かれたホブド川河畔のかつてダンビージャンツァン領であった土地をとおるとともに、現在のオブス県ウムヌゴビ・ソムのオリアスタイ・バグのバグ・センターの傍の彼の寺院と宮殿があったとされる場所を訪ね、土地の人々に話を聞いた。

ダンビージャンツァン領についての覚書

1912年の西モンゴル・ホブド辺境の解放に功績の あった者たちに対してボグド・ハーン政府から褒章のあったなかで、ジャー・ラマことダンビージャンツァンは、「エルデネ・ビシレルト・フチン・トゥグドルウル・ドクシン・ホトクト・ノモン・ハン」の称号を授かり、西の辺境のおおくのモンゴル人を平定する軍大臣に任命されて、タムガが与えられ、ドウルブド盟の土地に住むようになった。

1912年冬アルタイ辺境で盗賊をはたらくカザフ人の攻撃を撃退したことで、彼の名声はさらに高まり、ドウルブド2盟の9つの旗などがすこしずつ領民をダンビージャンツァンに『シャビ』として捧げたので、その世帯数はすぐに千以上となった。「たとえば、オラーンゴムのゾリグト・ハンは、自分の領地の一部分である『シャル・ツェフ』（ムンジク）寺を2百世帯の領民といっしょにダンビージャンツァンに寄進した。これらがつもりつもって、ダンビージャンツァンは、短期間のうちに2千世帯ちかくの領民をもつことになり」（Бурдуков 1969:97）、彼の「シャビ領」が出現するのである。また、「…ダンビージャンツァンは、ドウルベドの王侯たちに要請して、ザサグト・ハン・アイマグのダイチン・ベイル・ジャルチンゴンボドルジ旗など2つの旗から役人や書記などをシャビにすると連れて行った。こうしてシャビになった世帯は何百にも達した」（Жамъян-Очир n.d.）、「あなたのあの人を寄進してほしいと、ホブドの多くの旗に要求し、そうして寄進された人々を一箇所に集め、また寺院を建設するといっておおくの僧を連れて行った」（Жамсранжав 2000: 91）。

最終的に、ダンビージャンツァンの領民は、7つのオトクから構成され、共戴3年8月14日には、正確な数ではないが、つぎのページの表2・3のようになった。

ダンビージャンツァンは、このように多くの領民や家畜・財産をもつようになり、一時期ホブド、オリアスタイ、オラーンゴムの境である「タリーン・ボラグ」というところにいたあと、1913年8月すべての領民をホブド川の領地に集結させた。そこが、現在のオブス県ウムヌゴビ・ソムのオリアスタイ・バグの地である。その中心は、当時あったムンジグまたはシャル・ツェフという寺院であった。そこで、1913年9月、ノモンハンの称号を賜り独立の旗を建てることのできたことを祝うのである。

その時から彼はこの地を領地として領民とともに定住しようという試みをはじめた。マイスキーによれば、「…ジャー・ラマは、改革をすすめようとつとめた。行政の中心をホブドから彼の旗の中心にもってこようと決心し、そのための都市建設をすすめた。まず自分の寺院を建設してそこにホブド辺境にある寺院から僧たちを招集し住まわせようと考えた。モンゴル人にはなじみのない厳しい規則や清潔さを寺院で実行しようところみた。僧の数をへらすことを決め、『真の僧であるなら少なくともかまわない。それ以外の者は家畜の世話をすればいい』と彼はよく言った。モンゴル人に農業を広めることにたいへん熱意をもち、彼に請われてブルドゥコフはロシアから十数本の鋤をもってきたが、この試みはなんの成果もえることはできなかった。ジャー・ラマはまた、モンゴル人に、学校を建設し、ロシア製の皮の長靴を履かせ、ロシア風の家屋に住まわせ、草を刈りとることを教え、家畜の品種改良をすることを夢見た」（Майский 1959:209）。

このようなジャー・ラマのこころみの痕跡をわれわれは、オブス県ウムヌゴビ・ソム、オリアスタイ・バグで見ることができた。

そのひとつが、レンガ製造の跡である。「…オブス県ウムヌゴビ・ソム、オリアスタイ・ブリガートの地にレンガを焼く非常に独特の形の炉をつくり、自分の宮殿を建てるため5・6種類のレンガを手作業で製造し、山を越えて人々をならばせレンガをひとつずつ宮殿を建てる場所まで運ばせた。」（Сайжрах, Лхагвасүрэн 1997） 炉は粘土でつくられ、高さは約1.5メートル、土を盛った土台の上につくられている。（写真1） 炉にはレンガを焼く空気のとおり道があげられている。ホジリーン・ツェフというその場所は、粘土がよくとれるので、ホブド川から水を

引きレンガを焼き、南のガルゾーティーン・フトウル(峠)を越えてショブゴリーン・オラーンという建築現場まで運んでいた。その方法は、炉の傍らからそこまで人々をならばせ、手渡しで運んだという。ショブゴリーン・オラーンは丘で、その頂上を平らに切ってそこに寺を建てようとしたのだという。残ったレンガのいくつかは青いレンガで、さまざまな獣の姿のレリーフのあるものもある。炉からショブゴリーン・オラーンまでは約8キロメートルはなれている。

表2

No.	オトグ	世帯	人口
1	テルグーン・ゼンドメニ・エルデネ・オトク	201	662
2.	ベヘドルジ・エルデネ・オトク	201	583
3	バドマーラク・エルデネ・オトク	200	770
4	テクシボヤント・オトク	?	690
5	トゥグスジャルガラント・オトク	201	780
6	ウルヌフデルゲレフ・オトク	121	?
7	チャンダマニ・エルデネ・オトク	200	760
	計	1124	4245

(YTA: ΦA-135. T-1.XH-3)

表3 寄進されたシャビの世帯・人口

寄進した旗や寺院	世帯	人口
ウネン・ゾリグト・ハン盟	356	1248
デンチン・ダツァンのハンバ・ラマら	111	350
バト・ユルートル・トゥグス・ダライ・ハン盟	145	520 超
ウネン・ゾリグト・ハン盟トウメンジャルガル旗	13	47
ワールドのウイゼン公ラムジャブ旗	7	-
ミャンガド公アヨールザナ旗	2	-
ザサグト・ハン盟盟長ダイチン・ベイル・ゴンボドルジ旗	28	-
セツェン・ベイス・ジャルツァンゴンボツェデン旗	100	-
大臣チン・アチト・ベイル・ゴンチグダンバ旗	30	-
ダルハン・トウシェー公マニバザル旗	11	-
エルデネ・ベイス・グンセンスレン旗	18	-
バト・ユルートル・ダライ・ハン盟盟長エルヒト・ワン旗	6	-

そのほか、シャル・ツェフ寺院跡からは、寺院の建物の一部あったと思われる木の装飾も見つかった。(写真2) また、われわれは、自らをジャー・ラマの最後のシャビと称する人物とも会った。彼B・ウルジースレン氏の祖先は、ジャー・ラマによってここに連れてこられた人間だという。彼ら土地の人々は、ジャー・ラマの事績を後世に伝えようと努力している。彼のもとには、寺院で使われていたおおきなレンガのパネルやジャー・ラマが自分の寺院のまえに立って撮らせたという写真が保存されていた。(写真3)

おわりに

一枚の古地図を出発点に、それがつくられた時代の西モンゴルにおける歴史状況をあきらかにすることができた。また、そこに描かれた景観を実際にたどり GPS や現代の地図を組み合わせることで、その土地の歴史的な背景や土地利用についても知ることができた。

このようなところみは、とくに近代史を研究するうえで非常に有効であることがわかった。今後、GIS などのあたらしい技術を研究にどう生かすかその方法をさらに探る必要がある。

写真1 レンガを焼く炉の跡



写真2 シャル・ツェフ寺院跡から見つかった建造物の一部



写真3 オブス県ウムヌゴビ・ソム、オリアスタイ・バグの住民B・ウルジースレン氏(48)



参考文献

- Бурдуков, А.В. 1969. *В старой и новой Монголии: Воспоминания письма*. М.
- Kamimura, A. 2005. "A Preliminary Analysis of Old Mongolian Manuscript Maps: Towards an Understanding of the Mongols' Perception of the Landscape." In Futaki, H. and Kamimura, A. (eds.). *Landscapes Reflected in Old Mongolian Maps*. 2005. Tokyo. pp. 1-26.
- Жамсранжав, Б. (Дилов хутагт). 2000. *Ариун сэтгэл-Авралын үндэс./Дуртгал, намтар, өгүүлэл/*. УБ.
- Жамъян-Очир. n. d. *Дамбийжанцаны тухай тэмдэглэлүүд*. ГБС. УННС.
- Ломакина, И. 1993. *Голова Джа-Ламы*. Улан-Удэ, С.-Петербург
- Майский, И.М. 1959. *Монголия накануне революции*. М.
- Нямдаорж, Б. 2006. *Ховдын хязгаар (1911-1919 он)*, УБ.
- Сайжрах.Б.,Лхагвасүрэн.Б. 1997. *Жаа лам Дамбийжанцан КГБ-ийн тагнуул байжээ."Хувийн амьдрал"* сонин.1997.12. 11-р тал.